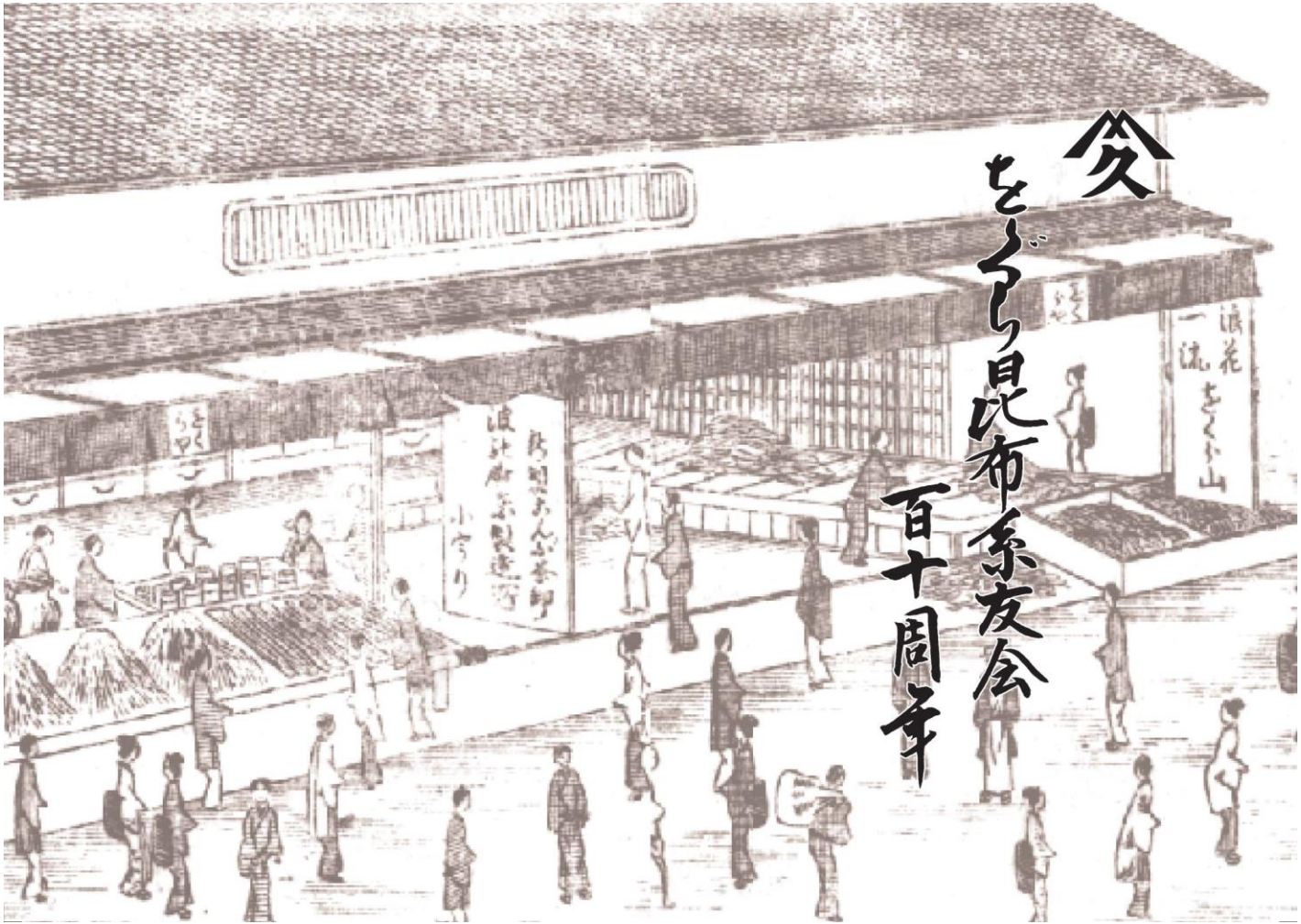

会

とくら昆布系友会

百十周年

母体はびんつけ油商

小倉屋は、寛保二年（一七四二年）より大阪の新町で
びんつけ油商を営んでいました。
びんつけ油とは、日本髪を固めて乱れを防ぐ固練の油のことで、
独特の香りを放つ化粧品の一種です。
そのびんつけ油商小倉屋へ奉公人として
松下久右衛門がやって来ました。
後に久右衛門は松原家の養子に入ります。
※また、久右衛門は後に久七に襲名。（以下　久七と表記）
久七は小倉屋を勤め上げ、主人から独立を許されます。
しかし、それには条件がありました。
小倉屋の屋号の使用は認められたものの、
びんつけ油以外の商売をすることを命じられたのです。
そこで久七が選んだのが昆布だったのです。
嘉永元年（一八四八年）のことでした。

北前船と永代濱

北前船とは、江戸中期から明治にかけて
北海道から大坂に積み荷を運んだ廻船のことです。
日本海を南下し下関を通り、瀬戸内海を
東へ向かいました。
北前船によって大量物流の時代が始まり、
北海道や寄港地の産物が、
天下の台所大坂へ運ばれてきました。
安治川や木津川に着いた北前船の積み荷は、
小舟に載せかえられ、昆布や塩乾物は
永代濱（靭公園付近）で荷揚げされて
市場に並びました。
久七もこの光景を見ていたことでしょう。

摂津名所図絵　江戸期の安治川橋

なにわの魁　小倉屋

二代目　松原久七の店には、松原武助、
山本利助、金谷才市らが奉公していました。
当時の様子を記した文献として、
明治十五年（一八八二年）の
「商工技芸浪華之魁」に
大阪名物の塩昆布を商う
久七の店が紹介されています。
　後に小倉屋の屋号は奉公人たちによって
継承されていくのですが、
主家と同じ昆布商として
広がっていったのです。

商工技芸浪華之魁　こんぶ商　松原久七

小倉屋会（をぐら昆布系友会）

　のれん分けにより継承され、小倉屋は徐々に店が
増えていきました。
　そして、明治三十六年（一九〇三年）に十五名の店主が集まり、
のれんを守り将来の発展を目指す「小倉屋会」が結成されました。
　その後も会員数は増え続け、大正十二年（一九二三年）に
「をぐら昆布系友会」と改称され今日に至っています。
　創業家である松原久七の店は絶えてしまいましたが、その奉公人
達によって小倉屋の のれんは受け継がれてきました。
　「をぐら昆布系友会」は、大阪で最も古い昆布商の集団で、
大阪の昆布業界を牽引してきました。
　現在は、三十一名の会員によって構成されています。
そして平成二十五年、皆様方のおかげをもちまして、
発足百十周年を迎えることとなりました。